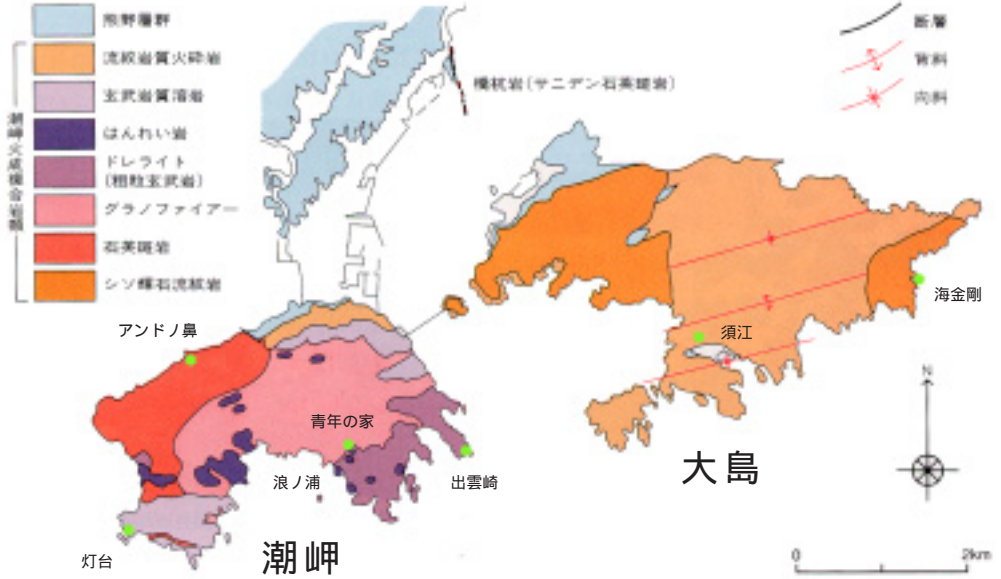


潮岬周辺の火成岩

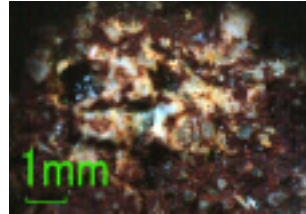
潮の岬と大島には、潮岬火成複合岩類と呼ばれ、玄武岩や流紋岩、はんれい岩などの火成岩が分布しています。これらの岩石は、熊野層群がたい積していた（今から1,500万年ほど前）ころ、このあたりの海底隆起帯をつくった火成活動によってもたらされたものです。橋杭岩をなす石英はん岩の岩脈は、その後の熊野酸性火成岩類をつくった火成活動（今から1,400万年ほど前）にともなってきたものです。

潮岬・大島の地質図 (URBAN KUBOTA 38より引用)



橋杭岩 (串本町)

熊野層群の割れ目にそって、地下からマグマがふき上がり、あつい板状の石英はん岩の岩脈ができました。その後、この地域の隆起と海水の侵食によって熊野層群の泥岩の地層がけずりとられ、かたい石英はん岩の岩脈が残されました。その岩脈の一部もくずれ、あたかも大島に向かって橋の杭をならべたような地形ができあがったのです。



石英はん岩の表面



(三宅, 1981)による、一部簡略化)

泥岩(下部)の割れ目にかん入って固まってきた石英斑岩(上部)



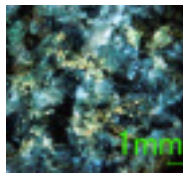
熊野層群の泥岩層の上にくずれた石英斑岩が転がっています。

潮岬と大島の火成岩

潮の岬の灯台の下では玄武岩溶岩、アンドン鼻あたりでは石英はん岩、浪ノ浦の西側では玄武岩の枕状溶岩やグラノファイアー、潮岬青年の家の下でははんれい岩、出雲崎ではドレライト(粗粒玄武岩)など、また、大島の須江では玄武岩質火砕岩、海金剛では流紋岩などが見られます。



玄武岩の断崖の上にたつ潮岬の灯台



斑レイ岩の表面



流紋



玄武岩の表面、黒っぽく見えます。



浪の浦西のはんれい岩



流紋岩の表面

橋杭岩



かん入してできた石えい斑岩の層

やわらかい熊野層群の泥岩層の割れ目にそって、マグマがかん入して、ひえて固まって石えい斑岩という岩石になりました。

やわらかい泥岩層はやがて海の水によって浸食されて、残ったかたい石えい斑岩の層もやがてくずれおちてきました。

近くに弘法の湯という古い温泉があります

熊野層群の泥岩層

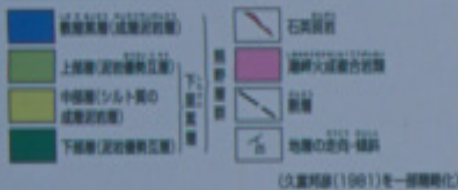


ころがっているのはくずれた石えい斑岩

次のページにも説明あります

橋杭岩に立てられていた説明です。

橋杭岩周辺の地層・岩石の分布

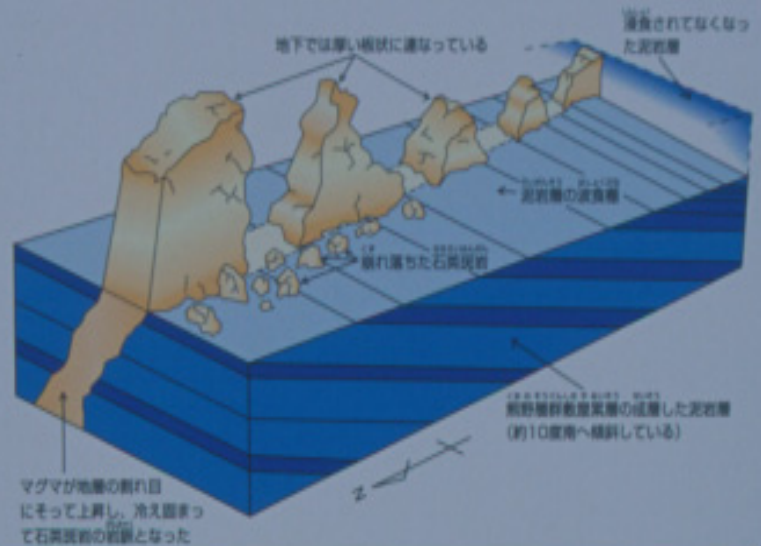


橋杭岩はどうしてできたの？



西の国海が覆び出したという熊野山にも、橋杭岩と同じ種類の岩脈があるとは驚きだな。

橋杭岩は、今から1,400万年前のマグマの活動とその後の隆起、海水による彫削がもたらした自然のオブジェと言うことができるのだ！



橋杭岩

今から1,500万年ほど前(新生代第三紀中新生の中ごろ)、熊野層群とよばれる砂や泥の厚い地層が海底にたい積した。橋杭岩のまわりの黒っぽい地層は、その中の敷屋累層の泥岩からできている。この地層がたい積した頃、大島から潮岬付近の海底は火成岩の隆起帯になっていた。

その後、1,400万年前になると、大峰山脈や那智から熊野にいたる地域で火成活動が起こった。この活動にともなって、北北西-南南東の方向にのびる地層の割れ目にそってマグマが上昇して冷えかたまり、橋杭岩のもとになる、直立した厚い板状の岩脈ができた。この岩脈は、石英斑岩という火成岩からできている。

やがて、すっかり陸地となった紀南の海岸は、荒々しい黒潮の波にさらされながらも、橋杭岩の岩脈はまわりの泥岩よりはるかに硬いために浸食されても残り、あたかも大島に向かって橋脚を並べたように、今もそそり立っているのである。

本州最南端にある、潮岬の灯台



潮の岬と大島は、約1500万年前に海底火山の活動によってできたと考えられています。ですから岩石はほとんどが火成岩です。灯台の下は、黒っぽい玄武岩でできています。岬の先は、黒潮が川のように流れています。



海金剛



大島の東端にある有名な観光地です。切り立った岩山は、流紋岩で太平洋の荒波でけずられています。近くには、日米修交記念館があります。

